様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2017
課題番号：２５３７０４２２

研究課題名（和文）フランス語および日本語におけるモダリティの発展的研究

研究課題名（英文）A extended Study of Modality in French and Japanese

研究代表者
渡邊　淳也（Watanabe, Jun-ya）

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：２０３４９２１０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：この研究においては、フランス語、ロマンス諸語と日本語における、動詞の時制・叙法、法的(準)助動詞、副詞類などのカテゴリーにわたるモダリティの多様な発現を、一貫した視点にもとづいて考察した。とりわけ、どのようにしてモダリティが、条件法、接続法、半過去形、叙想的時制・アスペクト、未来諸時制、pouvoir, devoir, falloir, sembler などの法的(準)助動詞、ジェロンディフ、ポリフォニー、伝聞表現、認知モードなどのさまざまな言語事象にあらわれるに至っているのかを示すことができた。

研究成果の概要（英文）：This study investigated various manifestations of the modality in grammatical categories such as verbal moods and tenses, modal (semi-)auxiliaries, adverbials in French, romance languages and Japanese. In particular, I showed the way in which the modality results in appearing in various language phenomena, including conditional mood, subjunctive mood, imperfective tense, tense de dicto and aspects de dicto, future tenses, modal (semi) auxiliaries pouvoir, devoir, falloir, sembler etc, gerundive, multi-voicedness, hearsay and modes of cognition.

研究分野：人文学

キーワード：モダリティ　フランス語　日本語　ロマンス諸語　認知モード

１．研究開始当初の背景

モダリティは、言語にとっても、その基盤をなす発話行為にとってもきわめて重要な概念であるが、その射程はたいへん広く、また、これまで充分には関連づけられてこなかった多様な文法領域がある。たとえば、つぎのような言語事象がモダリティの関連領域であるといえる。

(1) 動詞（叙法、時制）は、従来から多く研究されてきたテーマであるが、モダリティの標示をあらわす諸用法に的をしぼった研究が占める割合は小さい。とくに、時制によるモダリティの標示については、周辺的な扱いしかされてこなかった。動詞の叙法や時制が、なぜ、いかにモダリティを標示するに至るのか、という道すじを研究することは、当該領域に対してあらたな貢献となりうる。また、従来の動詞論では、非定型（不定法、分詞、ジェロンディフなど）に対する配慮はたいへん乏しかった。しかし、副詞句的な修飾をになうことができるこれらの形態が、モダリティに対して果たす役割は重要である。本研究では、非定型にも格段の注意をはらうこととする。

(2) 法的(準)助動詞 (semi-)auxiliaire modal は、従来からモダリティ研究の中心的対象でありつづけたが、かつては統辞的研究が主流であり、意味論的研究は 1990 年代からようやくさかんになってきたに過ぎない。このため、意味的な方面には未開拓の領域が少なくない。

(3) 文副詞類 adverbial de phrase は、モダリティの標示が語彙化されたものとみなすことができる。従来のモダリティ研究では、どちらかというと文法的な標示手段が研究されてきたため、語彙的な標示手段は、個々の語彙として研究されることはあっても、モダリティ論の枠組みにおいて研究されることは少なかった。本研究はその間隙をおぎなうことを目ざす。

(4) 連結辞 connecteur も、文副詞類の一種であることから、モダリティを標示すると考えられる。しかし、複数の文や発話の相互の関係性を標示するとともに、談話のなかにおけるそれらの位置を示すという点では、「メタ・モダリティ」ともいうべき、特異な位置を占める。連結辞研究は、発話者がみずからの発話を操作的に提示するさまを観察するための格好の場を提供する。

(5) ポリフォニー polyphonie の問題は、従来のモダリティ研究ではかならずしも重視されてこなかったが、モダリティが間主体的に構築される事例は多く、この方面からの考察は研究の発展に資するところが大きいと考えられる。

(6) 認知モード modes de cognition とアフォーダンス affordance は、いずれも言語における主観性を考察する際、重要な概念として近年注目されているが、個別言語によってそのあらわれ方には大きなちがいがあるにもかかわらず、多数の言語間での相違を前提とした研究はほとんどなされていない。本研究では、ともすると「ヨーロッパ諸語」という括りで D モード (Displaced Mode of Cognition) 的であるとされがちなフランス語に、実は日本語と同様の I モード (Interactional Mode of Cognition) 的な側面が多くみられることをさまざまな局面で実証する。

２．研究の目的

発話行為を介して、言語にとって根幹的な役割を果たしているモダリティを、前項であげた、これまで十分には関連づけられてこなかった多様な文法カテゴリーにわたって横断的に観察することにより、いっそう深く探求することをめざす。主たる対象はフランス語、日本語とするが、フランス語と関連の深いロマンス諸語にも視野をひろげ、他言語との対照のなかからこそ明らかになる知見も積極的に拾いあげる。規範的なジャンルに属するテクストのみを観察対象とするのではなく、口語・俗語における新たな表現や、フランス語についてはフランス以外のフランス語圏でみられる特徴的変異なども積極的に収集、分析し、議論の基盤とする。

３．研究の方法

初年度はさまざまなジャンルの言語資料を探索して用例を収集・整理し、コーパスを作成した。実例や、それに手をくわえた例文の容認可能性、直観的解釈、パラフレーズなどを自在に知ることができるよう、外国語については母語話者にインフォーマントになっていただき、調査を行なうとともに、各領域の専門家と面会したり、公開の研究会をひらいたりして、専門的知見を得るとともに、議論を行なった。また、当初の予定を前倒しして、初年度から海外の学会で口頭発表をおこなった。2 年目からはモダリティの各領域へと研究の範囲をひろげてゆくとともに、国内外の学会、研究会などでいっそう積極的に成果を発表した。最終年度には、各論的研究の成果を総合し、理論化を行なった。この成果をもりこんだ論文・著書を執筆するとともに、論文以外にも本研究課題全般についての報告書を作成し、刊行した。

４．研究成果

(1) 動詞（叙法、時制）をめぐって

① 未来諸時制について

まずフランス語の単純未来形と迂言的未来形（＜aller＋不定法＞）の対比について考察し、前者が発話状況からの断絶を要求するのに対し、後者には発話状況からの連続性や、

事態実現に向かう漸進性がみとめられることを示した。そして後者の連続性や漸進性は、aller の移動動詞としての基本的図式が反映していることを論じた。迂言的未来形の、時制的用法以外に豊富にみられるモダールな用法についても、同様の図式で説明できることを示した。

つぎに、フランス語の前未来形をとりあげ、「未来における完了」という時間的価値とは一見無関係のいわゆるモダールな用法に関しても、単純未来形の考察において抽出した図式に、結果残存型の完了相の概念を加えることで、構成原理によって説明できることを示した。

ロマンス諸語との対応については、カタロニア語、ガリシア語において、フランス語の迂言的未来形と同様の＜「行く」型移動動詞＋不定法＞という構成であるにもかかわらず過去を示す形式になっていることとの対比をおこなった。また、コルシカ語に独特の迂言的未来形＜avè da＋不定法＞についても、単純未来形との対比において考察した。さらに、対訳コーパスを用いて、フランス語の単純未来形・前未来形のすべての生起に対応するイタリア語、スペイン語、ポルトガル語、ブラジルポルトガル語、ルーマニア語における形式（未来諸時制のみならず、他時制、他叙法もふくむ）との対照研究も実施した。

これらの成果は下記５.に示した論文①、③、⑤、⑮、発表④、⑥、著書②、④に該当する。

② 過去諸時制について

フランス語の半過去形については、事態そのものを過去時に位置づける叙事的時制としての側面よりも、実は、事態を眺望する視点を過去時に位置づける叙想的時制の側面が強いことを主張した。さらに、半過去形の定義特徴とされることが多い未完了相というアスペクトについても、事態そのものの完了という叙事的レヴェルのほか、おうおうにして、「叙想的アスペクト」と研究代表者が命名した事態を眺望する方式にあらわれていることを示した。そして、半過去形に濃厚にみられる叙想性は、下記（5）で言及する、フランス語が選好する認知モードに依存していることを明らかにした。フランス語の半過去形にみられる叙想性の高さは、対訳コーパスにおける他のロマンス諸語との比較においても明らかになった。

つぎに、フランス語の大過去形にも、対応する単純時制である半過去形と平行して叙想性（とりわけ、事実そのものとしてとらえるのではなく、説明としてとらえかえしているときなど）が濃厚に観察された。また、フランス語の物語テクストにおいては、大過去形が局所的に語りの基調になっているといえるほど連鎖的に用いられることが特徴的であり、他のロマンス諸語には同様の現象はみられない。

さらに、前項①で述べたカタロニア語、ガリシア語の迂言的過去形についても研究し、「行く」型移動動詞（カタロニア語 anar, ガリシア語 ir）の基本的図式から迂言的過去形の諸特徴が演繹可能であることを示した。

これらの成果は下記５.に示した論文④、⑤、⑭、⑮、発表②、④、⑪、著書②、④に該当する。

③ ジェロンディフについて

ジェロンディフの明示されない意味上の主語は、規範的には支配節（proposition régissante）の主語と一致するものとされるが、この規範を守らない例も存外多い。本研究では、その非規範的な例を主語不一致ジェロンディフ（Gérondif non-coréférentiel）と呼び、その成立メカニズムを研究した。その結果、支配節の内容を認知する主体が暗黙にされ、その主体とジェロンディフの主語が一致することにより、表面的な主語不一致が起きていることが判明した。

また、連携研究者の早瀬尚子氏と共同して、懸垂分詞（dangling particle）とよばれる英語における類似現象との対照研究もおこない、フランス語のほうが英語より主語不一致事例の出現比率が高いことがわかった。このことは下記（5）で述べる認知モードの相違に帰せられると考える。

さらに、動詞の語彙的性質も考慮して、主語不一致ジェロンディフの個々の事例研究を続けた。とくに、en attendant, en passant などについては、下記（3）で述べる語用論化とのかかわりでも詳細に考察した。

これらの成果は下記５.に示した論文⑦、⑨、⑪、⑯、⑲、発表⑧、⑩、⑫、⑬、⑭、⑮、著書②、③に該当する。

④ 叙法について

ここでいう叙法（mode）は動詞の体系にふくまれる形態論的な概念である。

まず条件法（conditionnel）については、時間的用法から叙法的用法にいたるまで、多岐にわたる諸用法を、可能世界意味論で用いられる分岐的時間（temps ramifié）の図式によって説明できることを示した。

また、接続法（subjonctif）については、従来直説法に対して有標の叙法と考えられてきたために、その使用条件の定義が困難とされてきたが、むしろ逆に、従属節では接続法が無標の叙法であり、直説法のほうが断定的（assertif）な文脈で用いられる有標の叙法であると考えることにより、統一的な説明の方途を提唱した。

これらの成果は下記５.に示した著書①、④に該当する。

(2) 法的（準）助動詞をめぐって

法的（準）助動詞は、機能的でありながら語彙項目であるため、それ自体では事態を時間軸上に位置づけることはできない。そこで、条件法などの記述に用いた分岐的時間から、

時間情報を捨象した分岐的図式を用いて、そのいずれかを卓立したり、消去したりする操作を想定することにより、フランス語の pouvoir, devoir, falloir などの形式の用法を説明できることを示した。

また、sembler, paraître についても多様な用法の基盤に統一的図式を想定することで説明を試みた。

さらに、paraître の伝聞用法の研究にも着想を得て、日本語の助動詞「そうだ」について研究し、この助動詞が単なる情報の中継をあらわすのではなく、現発話の伝達意図を中継者が解釈した結果を伝えるとともに、その内容が発話状況に対して関与的であることを示すという仮説を立て、多数の実例で実証した。

これらの成果は下記５.に示した論文⑱、ならびに著書①、④に該当する。

(3) 文副詞類・連結辞をめぐって

元来談話マーカーではない副詞類が、談話的機能を帯びるようになる通時的な意味変化を語用論化（pragmaticalisation）とよび、研究対象とした。

まず、ジェロンディフ研究とのかかわりで、ジェロンディフ句 en passant, en attendant が談話マーカーに転化する過程を考察した。これらについては、付帯的な行為や状態を示すジェロンディフの機能と、動詞の語彙的意味から出発して、談話とのかかわり方を規定する機能へのつながりを跡づけることができた。

また、ceci dit, cela dit については、なんらかの発話をうけなおして、言語外の行為をみちびく用法から、ことなる発話をみちびく連結的用法へと発達したものであることが判明した。一方、ceci dit, cela dit と翻訳的関係にあると思われる日本語の「とはいえ」、「といっても」は、通時的な初出例からすでに連結的用法になっており、しかも、語源にふくまれる助詞「と」が予想させるところとちがって、当初から後件に付随した用法であったため、徐々たる語用論化が想定できない。このことは、「も」「は」といった助詞が語用論的な曖昧性をとりのぞいているからであり、それとの対比において、ceci dit, cela dit は意味的に決定不全（sous-déterminé）である。

これらの成果は下記５.に示した論文⑦、⑫、⑯、発表①、⑦、⑧、⑨、⑩、ならびに著書③に該当する。

(4) ポリフォニーをめぐって

フランスで発展している「論証的ポリフォニー理論」（théorie argumentative de la polyphonie）では、従来局所的に発話に他者性を帯びさせる潜在的発言者（énonciateur）を想定していたのに対し、近年、この発言者の概念を廃して、かわりに「トーン」(ton) という概念を導入した。トーンとは相互作用の規準的なシナリオであるが、あたかも発話全体を色づけているかのように理解される。「話者トーン」、「世界トーン」、「目撃者トーン」、「第三者トーン」などがあり、これらによって、さまざまなモダリティ表現や、時制、叙法の使用可能性が説明できる。本研究では新たに、トーンの概念がこれまで証拠性（évidentialité）研究と接続可能であることを指摘し、各種トーンと証拠性のカテゴリーとの対応づけを提案した。

また、日本語に人称代名詞の豊かなパラダイムが存在することについて、ポリフォニーの概念と関連づけて論じるとともに、次項(5) の認知モードともかかわっていることを明らかにした。

これらの成果は下記５.に示した論文⑩、⑰に該当する。

(5) 認知モードとアフォーダンスをめぐって

ここでいう認知モードとは、中村（2009）の提唱する概念であり、認知主体がどのように事態を認知し、概念化しているかの態様である。四囲の環境との相互作用にもとづく認知モードをＩモード（Interactional Mode of Cognition）といい、仮想的に環境から離脱し、あたかも状況外から客観的に眺めているかのような認知モードを D モード（Displaced Mode of Cognition）という。日本語はきわめてＩモード的な言語であり、英語はきわめてＤモード的な言語であるのに対し、フランス語は中間的な性格をもっており、I モード的な部分も多い。たとえば、叙想的時制、叙想的アスペクトの用法を豊富にもつ半過去形は、事態内部に入り込む視点をとる機能をもっており、I モードの時制である。また、主語不一致ジェロンディフも、認知主体を明示しない支配節にかかることから、事態にいわば没入する、Ｉモードを前提とする。

これらの、おもに動詞論の領域でフランス語のＩモード性を摘示したのち、語彙意味論の領域でも、フランス語にＩモード性が濃厚にみられ、さらにいうと、とくにフランス語の名詞や形容詞に、環境が主体に対してもちうる意味あい、すなわち、アフォーダンス(affordance) を言語化しようとする傾向が濃厚であることを立証した。

これらの成果は下記５.に示した論文①、②、⑥、⑧、⑨、⑬、⑰、発表③、⑥、著書③、④に該当する。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 19 件）

① 渡邊淳也「フランス語半過去形と叙想的時制・叙想的アスペクト」定延利之ほか（編）『テクストと時間』ひつじ書房, 2018 年刊行予定．査読あり．

② 渡邊淳也「フランス語の語彙の操作性とアフォーダンス」『ロマンス語学研究』，第

51 号, 日本ロマンス語学会, 2018 年刊行予定. 査読あり.

③ 渡邊淳也「フランス語の大過去 II」山村ひろみ（編）『現代ロマンス諸語におけるテンス・アスペクト体系の対照研究』, 科学研究費補助金 基盤研究（C）15K02482 報告書 CDRom, 九州大学, 第 2 部第 2 章, pp.1-18, 2018 年. 査読あり.

④ 渡邊淳也・小川紋奈「フランス語の単純未来形・前未来形とロマンス諸語における対応形式の対照研究」渡邊淳也・和田尚明(編)『諸言語における TAME の発現について』, 科学研究費補助金 基盤研究（C）25370422 による論文集, 筑波大学, pp.59-82, 2018 年. 査読あり.

⑤ 渡邊淳也「フランス語および西ロマンス諸語における「行く」型移動動詞の文法化」早瀬尚子・天野みどり（編）『構文の意味と拡がり』くろしお出版, pp. 223-245, 2017 年. 査読あり.

⑥ 渡邊淳也, ダニエル・ルボー「フランス語の sujet および対応する日本語の研究」青木三郎（編）『フランス語学の最前線』第 5 巻（特集：対照研究), ひつじ書房, pp. 1-29, 2017 年. 査読あり.

⑦ 渡邊淳也「En passant の文法化・語用論化について」『フランス語学研究』（日本フランス語学会）第 50 号別冊『パロールの言語学』, pp. 153-167, 2016 年. 査読あり.

⑧ 早瀬尚子、渡邊淳也「英語の懸垂分詞とフランス語の主語不一致ジェロンディフの対照研究」和田尚明・渡邊淳也（編）『日英語ならびに西欧諸語における時制・モダリティ・アスペクトの包括的研究』(科研費論文集）筑波大学 TAME 研究会, pp.97-179, 2015 年. 査読あり.

⑨ 渡邊淳也「主語不一致ジェロンディフと認知モード」『フランス語フランス文学研究』(日本フランス語フランス文学会）第 107 号, pp. 155-169, 2015 年. 査読あり.

⑩ 渡邊淳也「論証的ポリフォニー理論をめぐって」川口順二（編）『フランス語学の最前線』第 3 巻（特集：モダリティ), ひつじ書房, pp. 275-304, 2015 年. 査読あり.

⑪ Jun-ya Watanabe , « Gérondif non-coréférentiel », *Voix plurielles*, vol.12, no.1, pp.207- 224, 2015 年. 査読あり.

⑫ 渡邊淳也「Ceci dit, cela dit について」『文藝言語研究・言語篇』(筑波大学）第 67 号, pp. 99-120, 2015 年. 査読あり.

⑬ 渡邊淳也「Essuie-tout の意味論」『外国語教育論集』（筑波大学）第 37 号, pp. 75-88, 2015 年. 査読あり.

⑭ 渡邊淳也「前未来形のモダールな用法について」『文藝言語研究・言語篇』(筑波大学) 第 66 号, pp. 35-56, 2014 年. 査読あり.

⑮ 渡邊淳也「叙想的時制、叙想的アスペクトと認知モード」春木仁孝・東郷雄二（編）『フランス語学の最前線』第 2 巻（特集：時制), ひつじ書房, pp.177-213, 2014 年. 査読あり.

⑯ 渡邊淳也「En attendant について」『フランス語学研究』(日本フランス語学会）第 48 号, pp. 85-93, 2014 年. 査読あり.

⑰ Jun-ya Watanabe , « Les termes d'auto-désignation en japonais ： un cas de polyphonie », *Studies in Foreign Language Teaching* vol.36, pp.37-46. 2014 年. 査読あり.

⑱ 渡邊淳也「いわゆる伝聞の「そうだ」について」『文藝言語研究・言語篇』(筑波大学) 第 65 号, pp. 19-39, 2014 年. 査読あり.

⑲ 渡邊淳也「主語不一致ジェロンディフについて」『文藝言語研究・言語篇』(筑波大学) 第 64 号, pp. 95-178, 2013 年. 査読あり.

〔学会発表〕（計 15 件）

① Jun-ya Watanabe , « Ceci dit, cela dit, towaie, toittemo », 2017 年 12 月, Approche contrastive franco- japonaise sur la grammaticalisation, la lexicalisation, le figement（於名古屋大学).

② 渡邊淳也「フランス語の単純未来形とロマンス諸語における対応形式の対照研究」2017 年 10 月, 東京フランス語学研究会第 35 回研究会（於早稲田大学).

③ 渡邊淳也「フランス語の語彙の操作性とアフォーダンス」2017 年 5 月, 日本ロマンス語学会第 55 回大会（於神田外語大学).

④ 渡邊淳也「フランス語および西ロマンス諸語における「行く」型移動動詞の文法化について」2016 年 12 月, 日本フランス語学会第 311 回例会（於早稲田大学).

⑤ Naoaki Wada, Jun-ya Watanabe , « *Be going to* and *aller* ： A temporal structure-based analysis of 'go'-futures in English and French », 2016 年 6 月, Chronos 12 (於フランス共和国カーン・ノルマンディー大学 Université de Caen-Normandie).

⑥ 渡邊淳也「フランス語半過去形と「叙想的時制」」2016 年 5 月, 日本ロマンス語学会第 54 回大会（於九州大学).

⑦ 渡邊淳也「En passant の文法化・語用論化について」2016 年 4 月, 東京フランス語学研究会第 25 回研究会（於早稲田大学).

⑧ Jun-ya Watanabe , « Gérondif non-coréférentiel », 2016 年 1 月, Étude du français basée sur l'observation des usages réels (日本フランス語学会研究促進プログラム「パロールの言語学」大阪大会, 於大阪大学中之島センター).

⑨ 渡邊淳也「Ceci dit, cela dit と語用論化」2015 年 4 月, 日本フランス語学会第 298 回例会（於早稲田大学).

⑩ 渡邊淳也「主語不一致ジェロンディフと認知モード」2014 年 10 月, 日本フランス語

フランス文学会 2014 年秋季大会（於広島大学).
⑪ 渡邊淳也「単純未来形と迂言的未来形」2014 年 5 月，日本フランス語学会第 292 回例会（於早稲田大学).
⑫ 早瀬尚子，渡邊淳也「英語の懸垂分詞とフランス語の主語不一致ジェロンディフ」2013 年 12 月，関西フランス語研究会英仏対照ミニ・シンポジウム（於関西大学). 招待講演.
⑬ 渡邊淳也「主語不一致ジェロンディフについて」2013 年 10 月，福岡大学言語学講演会. 招待講演.
⑭ Jun-ya Watanabe , « Gérondif non-coréférentiel », 2013 年 10 月，La transgression：de l'émancipation à la progression（於フランス共和国西部カトリック大学（アンジェ）Université Catholique de l'Ouest (Angers))
⑮ 渡邊淳也「主語不一致ジェロンディフについて」2013 年 4 月，日本フランス語学会第 284 回例会（於跡見学園女子大学).

〔図書〕（計 4 件）
① 渡邊淳也『叙法の謎を解く』白水社，pp.180, 2018 年 5 月（単著).
② 渡邊淳也『コルシカ語基本文法』早美出版社, pp.120, 2017 年 9 月（単著).
③ 渡邊淳也『ジェロンディフと現在分詞の意味論・語用論』デザインエッグ，pp.184, 2017 年 3 月（単著).
④ 渡邊淳也『フランス語の時制とモダリティ』早美出版社, pp.170, 2014 年 3 月（単著).

〔産業財産権〕
なし

〔その他〕
ホームページ等
① 研究代表者個人ホームページ
http://www.ne.jp/asahi/watanabe/junya/
② 筑波大学 TAME 研究会
http://www.lingua.tsukuba.ac.jp/lgfr/tame/

６．研究組織
(1)研究代表者
渡邊　淳也（WATANABE, Jun-ya）
筑波大学・人文社会系・准教授
研究者番号：20349210

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
早瀬　尚子（HAYASE, Naoko）
大阪大学・言語文化研究科・准教授
研究者番号：00263179

(4)研究協力者
なし